

学校だより

3月号

# 一中の桜並木

令和8年3月19日

「教育目標」

考える人

思いやりのある人

助け合う人

成しとげる人



連雀学園三鷹市立第一中学校 校長 宮城 洋之

## 第79回 卒業式「校長式辞」(抄)

校長 宮城 洋之

本日(3月19日)、本校第79回卒業式を挙行了しました。式中で校長から卒業生に向けて送ったメッセージの一部を紹介します。

2011年3月、当たり前の日常が一瞬にして失われる出来事がありました。15,901名もの命が奪われ、今なお2,500名以上の方が行方不明となっている東日本大震災です。東京都内でも最大震度5強の大きな揺れとなりました。卒業生の多くはまだ0歳かあるいはお母さんのお腹の中でその地震を経験したであろうと思います。それから15年、皆さんの人生と同じ年月の間、当たり前の日常を取り戻すため取り組みが被災地では続いています。

岩手県の海沿いに、釜石という街があります。津波で甚大な被害を受けた街ですが、中学生が小学生の手を引いて高台へ避難したことで、小・中学生の99.8%が津波の難を逃れました。後に「釜石の奇跡」と呼ばれるようになったこの出来事を知っている人も多いのではないでしょうか。

震災発生翌年の夏、私は釜石市を訪れました。全国から集まった中学生が、震災からの復興やまちづくりについて話し合う「全国中学生生徒会サミット」が開催されたためです。このサミットには被災地を含む30以上の都道府県、さらに海外からも中学生が集まり、3日間にわたって真剣な話し合いが行われました。

会場となった中学校では、校庭で部活動も行われており、また何よりもサミットに参加している中学生たちの熱心な姿からは復興に向けた確かな歩みを感じました。しかし、その日の視察で港に近い市街地に向かうと、目に飛び込んできたのは荒地の中に、半ば瓦礫となった建物が点在する風景でした。渦を巻く黒い水こそありませんが、そこにあったのは震災発生時にテレビニュースの映像で見た津波の光景そのものでした。

明るく私たちを迎えてくれた釜石の中学生の中にも、家族を亡くしたり、避難所での生活が続いたりする人が少なくなかったはずですが、そう考えると、復興というものは、外から見て想像するほど簡単なものではないということを感じました。

それでも、3日間にわたる話し合いの最後に多くのグループから発表されたのは、「未来に向かって自分たちが主体となろう」「そのために互いの絆を深めよう」という前向きなメッセージでした。

「いつかこの海をこえて」

これは津波で校舎が全壊した釜石東中学校の生徒たちが制作にかかわった歌の題名です。歌を作るにあたって、生徒たちは自分の今の気持ちを言葉にしました。「がれき」「黒い波」「闇」「絶望」「行方不明」——そのような言葉がありました。苦しさを誰にも話せない辛さを書いた生徒もいました。

しかし、それ以上に多く寄せられた言葉は、「希望」「感謝」「仲間」「友達」だったそうです。そこから生まれた歌詞の一節が、

「いつかこの海をこえて 僕たちは舟を出そう」

という言葉でした。未来へ向かって手を取り合おうという呼びかけです。

今、世界に目を向けると、まるで二十世紀に戻ったかのように戦争や紛争が続き、毎日のように人命が奪われています。また、SNSには、自己中心的で相手への共感や想像力に欠けた言葉が散見されるように思います。このような時代だからこそ、皆さんには、隣にいる人と、そして世界の人々と、「共に生きる」という視点を大切にしてほしいと思います。

「いつかこの海をこえて」には、次のような歌詞があります。

目をとじれば そこに なつかしい笑顔

いつの日も そばにいる たとえ離れていても

だから前を向いて 歩んでゆこう

歴史的な大災害の中にあっても、希望の灯を灯し続けたのは「共に生きる」人の存在だったのです。この第一中学校で、そして連雀学園で過ごした日々が、皆さんにとって、人と共に生きることの原点となることを願っています。

(「いつかこの海をこえて～釜石東中学校生徒の思いをここに～」作詞・作曲：ミマス)



3年間の思い出が詰まった体育館